

**学校法人鹿児島純心女子学園
鹿児島純心女子短期大学
機関別評価結果**

平成 20 年 3 月 19 日

財団法人短期大学基準協会

鹿児島純心女子短期大学の概要

設置者	学校法人 鹿児島純心女子学園
理事長名	末吉 スナ
学長名	稲井 道子
A L O	平山 久美子
開設年月日	昭和35年4月1日
所在地	鹿児島県鹿児島市唐湊4丁目22番1号

設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
生活学科	生活学	120
生活学科	こども学	40
生活学科	食物栄養	40
英語科		70
	合計	270

専攻科および入学定員(募集停止を除く)

なし

通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

機関別評価結果

鹿児島純心女子短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成 20 年 3 月 19 日付で適格と認める。

機関別評価結果の事由

1. 総評

平成 18 年 6 月 17 日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

当該短期大学の特色は、設立者シスター江角ヤス氏のカトリック信仰を基礎に聖母マリアをモデルとするキリスト教ヒューマニズムを反映した全人教育にある。

教員組織などの整備は、短期大学設置基準を充たしており、語学教育充実のために外国人教員を多く採用していること、少人数教育を展開していることなどの特色がみられる。教員の研究活動も活発で、科学研究費補助金、その他の外部研究資金調達の実績もある。また、校地・校舎、図書館も短期大学設置基準を充たし、情報設備や学生の厚生施設などの教育環境も整っている。

平成 19 年度入学定員充足率は良好である。また、就職率もここ数年、堅調に推移している。

自己点検・評価を最重要課題として学則に位置づけ、平成 7 年に自己点検・評価委員会が組織され、平成 16 年度から「自己点検・ファカルティ・ディベロップメント (FD) 委員会」へと発展させ、改革・改善の絶え間ない努力をしている。この結果、平成 16 年度に英語科の「特色ある大学教育支援プログラム (特色 GP)」が採択された。

カリキュラムも整備され、授業評価における学生の満足度 (4.3) はかなり高く、退学や休学が少ない。また、教職員間の連携もよく、学生のケアは良好で、近年多様な学生の入学に伴い、習熟度別クラスの実施、週 5 回 30 分間ペースの補習を 1 限前に実施している。クラス担任制がとられ、学生の学習・生活支援は教職員により、きめ細かく行われている。卒業生の学校に対する評価も良好で、同窓会活動も盛んである。

地域社会との連携体制の強化をめざし、生涯学習センターの活動として、「英会話講座」・「子育て支援講座」・「食育講座」などの開設に地域の教育委員会や外部団体の協力のもと市民への学習支援に貢献している。

理事会、評議会には監事も出席して、適切に運営されており、教職員の意見を反映できる体制を整え、「中・長期計画」に基づき、将来展望を開いている。

財務の運営は予算・決算とも規程にしたがって適正に執行されており、「中・長期計画」にそった事業も着実に実施されている。監事、公認会計士からも監査・指導が実

施され、運営は良好である。財務体質は、毎年、入学定員以上の学生を確保し、また教育研究費も帰属収入の 20%以上を確保し、収入超過で順調に推移している。

2. 三つの意見

(1) 特に優れた試みと評価できる事項

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 英語学科 1 年生の全寮制は、ネイティブ・スピーカーの女性教員が寝食をともにして指導に当たるなど学習効果を高め、さらに海外研修を通して、学習のモチベーションを高めている。
- 英語科特色 GP（平成 16 年採択）が、国際化教育を鹿児島府の精神風土の中で培った英語力を涵養する実践として、現在も継続されている。

評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

- 本年度も日本英語検定協会の団体賞として文部科学大臣奨励賞を受賞している。

評価領域Ⅹ 改革・改善

- 自己点検に加え、他の短期大学と相互評価を行っている。また、その際、相互評価のテーマに基づいて実施される調査に加え、公開授業も実施し、学科全体での改善に取り組んでいる。

(2) 向上・充実のための課題

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 授業評価については、1 科目抽出ではなく、全教科にわたって把握できるような工夫をされたい。

評価領域Ⅹ 改革・改善

- 自己点検・評価活動が教育の改善にどのように結びついているか、その具体的な向上・充実の実施方法を見出すことが今後の課題である。

(3) 早急に改善を要すると判断される事項

なし

3. 領域別評価結果

	評価領域	評価結果
評価領域Ⅰ	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域Ⅱ	教育の内容	合
評価領域Ⅲ	教育の実施体制	合
評価領域Ⅳ	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域Ⅴ	学生支援	合
評価領域Ⅵ	研究	合
評価領域Ⅶ	社会的活動	合
評価領域Ⅷ	管理運営	合
評価領域Ⅸ	財務	合
評価領域Ⅹ	改革・改善	合

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

当該短期大学の建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標の特色は、設立者シスター江角ヤス氏のカトリック信仰に根ざす信念にある。先ず、建学の精神は、「キリスト教ヒューマニズムに基く全人教育」を目指し、養成する人材が、キリスト教ヒューマニズムを具現して生きられた聖母マリアをモデルとしていることは、教育上、極めてユニークである。このモデルに触発されて成長する女性像は、「現代に生きる日本女性として自己の完成を願って知性を磨き伸ばし・・・社会の良心として愛と浄化のともし火となる」ことを目指す際立った人間像を呈示している。また、学園標語も「マリアさまいやなことは私が喜んで」という人間の積極的な在り方を示しているが、これは現代人が陥りがちな自己中心的な生き方を捨てて、積極的に隣人のためにいのちを注いで奉仕をする自己犠牲的な「マリア」をモデルとする女性像を短期大学の教育の特色としてその意味を十分に示している。

評価領域Ⅱ 教育の内容

二学科に提供される充実したカリキュラムは、熱心に履修した学生たちに多大な教育効果を与え、二年後の卒業時には、優秀な結果を出している、と評価できる。カリキュラムには、学科固有のカリキュラムに加え、関連した資格取得に必要なカリキュラムも提供されていて、資格取得の割合も高い。また、教職員間の連絡もよく、学生のケアは良好と考えられる。教育課程の絶え間ない改革への取組みは、普段の色々な活動でフィードバックを行っている。その努力の一つが、英語科の特色 GP への応募、採択となって実を結んだ。

生活学科の特色 GP の取組みがヒアリング対象校として残ったことは、不断の努力が結実したものと考えられる。今後、その発展が期待される。

近年、多様な学生の全入時代に伴い、基礎学力の低い学生への対応は緊急の課題である。習熟度別クラスを編成して、なお基礎学力の低い学生に対しては、週 5 回 30 分間のペースで基礎講座を 1 限前に行っている。

評価領域Ⅲ 教育の実施体制

教員組織などの整備においては、短期大学設置基準の教員数の基準を充足しており、教員も短期大学の教員として、ふさわしい資格と資質を有している。教育環境の整備・活用においては、短期大学設置基準の校地・校舎の規定を充たすとともに、情報設備や学生の使用する設備・場所などの教育環境も整い、安全面にも充分配慮されている。図書館も短期大学としての十分な規模と機能を有している。また、教育内容では、外国人教員を多く採用していること、少人数教育を展開していることなどの特色がみられる。以上により、当該短期大学の教育の実施体制は充分であり、短期大学としての基準を充たしている。

評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

教育目標の達成への努力においては、単位の取得状況は良好であり、授業評価は学生の満足度がかなり高く、平均点の向上もみられる。また、退学や休学が非常に少ない。資格取得の種類も多く高率を維持している。これらは、教育目標の達成に向けて、短期大学職員の努力が不断に行われている成果である。学生の卒業後評価の取組みは、就職率も十分に高く維持されており、さらに専門就職の割合の高いのが特色である。卒業生の学校に対する評価も良好であり、同窓会活動も盛んである。以上より、当該短期大学の教育目標の達成度と教育効果の領域においては、短期大学としての基準を十分に充たしている。

評価領域Ⅴ 学生支援

学生支援は、全般的に充実している。クラス担任制がとられ、学生の学習・生活支援は教職員により、きめ細かく行われている。就職内定率も 90%を超えている。

評価領域Ⅵ 研究

教員の研究活動は活発であり、科学研究費補助金、その他の外部研究資金の調達の実績もある。

評価領域Ⅶ 社会的活動

地域社会との連携体制を一層強化することをめざし、教育研究と地域振興との一体化のありようを常に追求している。生涯学習センターの活動が活発に行われ、「英会話

講座」・「子育て支援講座」・「食育講座」などの開設に地域の教育委員会や外部団体の協力のもと市民への支援に努めている。

評価領域Ⅷ 管理運営

理事会、評議会には監事も参加して、適切に運営されており、管理・運営協議会を設置して広く教職員の意見を反映できる体制を整えている。理事長のリーダーシップのもと、改革委員会を設置して、「中・長期計画」を理事会で決議し、将来の展望を開いている。

学長は定例開催の教授会を通して、FDにも留意して学生のアンケートに耳を傾け、常に教育の改善に努力している。そのリーダーシップのもと平成16年に文部科学省の特色GPの採択を受け、英語教育に大きく貢献している。

併設大学と短期大学のキャンパスが離れているため困難かもしれないが、引き続き学校法人全体として事務組織（特に広報課、会計課など）のより一層の効率化に努めることが望ましい。

評価領域Ⅸ 財務

財務の運営は予算・決算とも規程にしたがって適正に執行されており、「中・長期計画」にそった事業も着実に実施されている。監事、公認会計士からも監査・指導が実施され、運営は良好である。

財務体質は、毎年、入学定員以上の学生を確保し、また教育研究費も帰属収入の20%以上を確保し、収入超過で順調に推移していることから現状では全く問題はないと考える。

評価領域Ⅹ 改革・改善

自己点検・評価を最重要課題として位置づけ、学則に謳われていることが着実に進められている。平成7年に自己点検・評価委員会が組織され、平成16年度から「自己点検・FD委員会」へと発展し、改革・改善の絶え間ない努力をしている。それに伴い、改革・改善の内容も充実し、公開授業まで行うようになった。この努力の結果、英語科の特色GP（取組名称：モチベーションを高める体験型英語教育）となって実を結んだ。

生活学科も特色GP獲得に向けて全学的な取組みを行った。